

平成30年度 小林立牛津中学校 学校評価結果

<b>1 学校教育目標</b>	<b>2 本年度の重点目標</b>
豊かな心をもち、たくましく学び続ける生徒の育成 ～主体性を高めることを通して～	①確かな学力の育成:基礎的基本的な学習内容の定着と活用力の向上を図る ②豊かな心の育成:認め合い支え合う集団づくりを推進し、思いやりの心の育成を図る ③健やかな体の育成:健康、安全に対する意識を高め、基礎的な体力の向上を図る

達成度 A:ほぼ達成できた  
B:概ね達成できた  
C:やや不十分である

**3 目標・評価**

**①確かな学力の育成**

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	○教職員の資質向上	授業研究の推進	「授業づくりのステップ1・2・3」を効果的に用いた牛津中授業スタイルを確立する。	・全教科、全職員による公開授業を実施する。 ・校内研究会を中心とした他教科との指導案検討会を行う等、全職員の協力と共通理解を基にした授業研究を推進する。	A	・アンケートの結果より、「先生方は、分かりやすいと感じる授業に取り組んでいる。」と答えた生徒の割合が92%であった。また、「めあて」から見直しを持てるようになったり、WBを使った「学び合う活動」に意欲的に取り組む姿が見られるようになったりしたことから、牛津中授業スタイルが生徒に浸透していると考えられる。	・「学び合う活動」に苦手意識を持つ生徒が少数であるが、形態や活動内容の工夫が必要である。 ・司会者の育成や、WBの活用方法を研究することで、「学び合う活動」の活性化が期待できる。
教育活動	●学力向上	活用力の向上	・全国・県学習状況調査における「活用」に関する問題の正答率を県平均以上にする。	・活用力の向上を意識した年間計画を全教科で作成し実践する。 ・定期テスト等で活用力を問う問題を出題する。	B	・定期テストで活用力を問う問題を出すことにより、生徒のつまづきがより把握できるようになり、きめ細やかな指導につながった。H30年12月調査では、2年生の理科において正答率が県平均を上回った。また、2年生においてはH29年度と比べるとほとんどの教科で県平均との差が縮まっていた。	・成果は見られるものの、正答率が県平均を下回っている教科があるため、年間計画や指導方法の再検討をする。 ・学習状況調査の誤答分析を行うなどにより、生徒のつまづきを把握し、的確な指導につなげる。
		学習規律の定着と表現力等の向上	・学習規律を高めることで学習環境を整え学習意欲の向上を図る。 ・学びの交流を図ることで表現力の向上を目指す。	・授業の約束三カ条の周知徹底と生徒会による朝の「立腰」放送や授業前の呼びかけを確実に行う。 ・授業において個々の考えを認めたり、お互いの考えを伝えたりする場面を設定する。	B	・立腰と授業の約束三カ条の周知徹底は、生徒会活動と生徒指導部との連携を行い一定の成果を出すことができた。 ・アンケート結果から約9割の生徒が、「学び合う活動」が好きだと感じており、学習意欲の向上に一定の効果があったと考える。	・「立腰」や「授業の約束三カ条」を中心に生徒の意識を高めながら、学習規律の向上や学習意欲の向上を図り、学力の向上を目指す。 ・表現力の向上を目指して、学びの交流を取り入れた授業改善に今後も継続して取り組む。
		家庭学習の定着と充実	・家庭学習時間1時間以上を1年70%、2年80%、3年90%にする。	・自学ノートの有効的で継続的な活用を推進する。 ・家庭訪問で「学習の手引き」を全家庭に配布し、家庭学習の習慣化に向けての協力を要請する。	B	・アンケートで『家庭学習の大切さを理解し、毎日平均1時間以上家庭学習に取り組んでいる』に「あてはまる、だいたいあてはまる」と答えた生徒は、1年で66%、2年で59%、3年で72%となっており、全学年において家庭学習時間の目標を達成することができなかった。	・家庭での学習環境づくりの一環として、自主学習ノートには継続して取り組むが、それが形式的になっていたり、未提出者が増えたりしており、学習の意識づけと合わせて自主学習方法の見直しと改善を図る。
		読解力の向上	・テスト等で自分の考えをまとめたり、文中の要点を抜き出ししたりする場面での無記入率を減らす。 ・学校図書館の全校生徒の年間貸出数を平均20冊以上にする。	・毎週金曜日、朝の時間に「新聞コラム」の書き写しを行う。語彙力を高めるとともに、内容に応じたタイトルを考えることで読解力の向上を図る。 ・学校図書館を活用した授業実践や生徒会と連携した活動を活性化して読書活動を推進する。	B	・新聞記事から答えを抜き出ししたり、自分の考えをまとめたりする活動に途中から変更した。これらは実際のテスト等でも求められる力であるため、書き写し活動よりも熱心に取り組むようになった。 ・学校図書館の全校生徒の年間貸出数は目標の一人平均20冊を達成することができた。	・発達段階を考慮し、学年に応じて使用する記事の内容を変える。 ・今後もより魅力的な学校図書館となるよう図書館便り(かさぎ通信)を出してより多くの本を紹介する等、生徒の読書活動を活性化させたい。
	◎教育の質の向上に向けたICT活用教育の実施	学習意欲の向上につながるICT活用研究	・効果的なICTの利活用で学習の質と生徒の興味・関心を高め、学力の向上を図る。	・教職員のスキルアップ研修を行ったり、お互いの教材を共有したりすることで教材の開発を進める。	A	・ICT支援員と連携を図り、ICTの利活用に努めた。また、アンケートで『電子黒板などを利用して、生徒の興味関心を高める授業を工夫している』に「あてはまる、だいたいあてはまる」と答えた生徒は89%、保護者は91%であった。	・ICT機器活用の充実、教員のスキルアップのために、ICT支援員と連携した研修や情報提供を継続して行う。 ・教科間だけでなく、道徳や学活、総合的な学習の時間でも活用できるように学年間での情報交換や授業実践を増やす。

②豊かな心の育成							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	望ましい学級集団づくりの推進	・生徒一人一人が安心して生活できる学級集団づくりを推進し、学級生活満足率の割合を5ポイント以上増やす。	・年2回のQU診断テストの実施と検証を行い、それに基づいた安心して生活できる学級集団づくりを推進する。	B	・アンケートで『学校は、生徒が安心して学校生活ができる望ましい学級・学年集団づくりをしている』に、「あてはまる、だいたいあてはまる」と答えた生徒は89%、保護者は82%であった。教職員は65%であったが、これはQU診断テストを十分に活用できていないという反省からきたものである。	・今後も年2回実施のQ-U診断テストの結果を分析し、それを活用するための研修会を実施して学級づくりに必ず生かしていく。また、そのことに対する各クラスの情報法交換を行いながらお互い改善を図っていく。
		人権・同和教育の推進	・日常的に人権が尊重される環境作りを行う。 ・生徒一人一人の人権意識の高揚を図る。	・授業実践交流会に組織的に取り組むことで、人権尊重の精神に立った学校・学級づくりに努める。 ・人権作文や人権標語に取り組み、実行委員会を中心とした人権集会を実施する。	B	・実行委員会形式による人権集会と人権標語に取り組むことができた。また、アンケートで『学校は、生徒の人権意識を高め、日常的に人権が尊重される環境づくりを行っている』に、「あてはまる、だいたいあてはまる」と答えた生徒は1年で90%、2年で91%、3年で88%であった。	・今後も人権・同和教育を根拠とした集団づくりに継続して取り組むが、個人と集団の両面から人権意識を高める取組を実践する。 ・人権・同和教育に関する職員研修の時間を確保する方策を検討する。
		道徳教育の充実	・全クラス年1回以上、保護者に授業を公開する。 ・生徒の自己肯定感の育成を図る。	・フリー参観デーでふれあい道徳を実践する。 ・生徒の良さを認め、褒める状況づくり、場の工夫により自己肯定感の育成を図る。	B	・牛津中の道徳の授業スタイルや評価の仕方などを全職員に提案し、来年度に向けての準備を進めた。生徒のアンケートで『道徳の授業を通して、自分の心や感性が豊かに成長していると思う』に、「あてはまる、だいたいあてはまる」と答えた生徒は84%であった。	・早めに話し合いをもち、学校全体の授業スタイルを決めることで、来年度へのスムーズな移行ができると考える。また、今年度教材研究をした資料を提供したり、研修会で学んだ資料を配付したりしながら全校で意識を高めていきたい。
		生徒会活動の充実	・生徒会活動としての無言清掃やボランティア活動の推進による自己達成感の高揚を図る。	・生徒会による校内放送での呼びかけや体育館での振り返り等で無言清掃の充実を図る。 ・生徒会V.S部を中心に清掃活動やボランティア活動を計画的に実施する。	B	・生徒の自己達成感の高揚をめざして、生徒が中心となった生徒会活動に取り組んだ。また、アンケートでは生徒・保護者ともに清掃活動やボランティア活動などを通して公共心が育っていると感じている割合が高かった。	・各種会議が建設的で有意義な話し合いになるためにもしっかりしたリーダーを育成していく。 ・今後も生徒会行事の見直しや改善を行うとともに、校務分掌とのさらなる連携を模索する。
	●いじめ問題への対応	いじめ予防及びいじめの早期発見、早期対応の徹底	・生徒の変容を常に観察し、計画的な調査等を実施する。	・生徒指導部や生徒支援部会での情報交換を充実させ、生徒指導協議会を中心に全職員で情報を共有する。 ・毎月の生活アンケートを実施する。	B	・生徒指導部や生徒支援部会を毎週開いたり、毎月の生活アンケートを実施したりして情報収集に努めた。また、生徒と保護者のアンケートでは、いじめの予防及び早期発見、早期対応に対する学校の取組は、約85%が好意的な評価であった。	・今後も生徒指導部や生徒支援部会の運営を充実させ、職員研修等で職員のスキルアップを図って、いじめの未然防止を推進していきたい。

③健やかな体の育成							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●健康・体づくり	部活動や体育的行事の充実	・部活動や体育的行事を通して健やかな体を育てる。	・部活動紹介、選手推戴式、体育大会などの行事を通して、互いに励み合い競い合いながら、健康や体づくりの意識を高めるよう支援する。	B	・アンケートで『部活動や体育的行事を通して、健康や体づくりの重要性を意識するようになった』に「あてはまる、だいたいあてはまる」と答えた生徒が85%、保護者は89%で、学校の取組に対して一定の評価を得ることができた。	・生徒、保護者ともに部活動指導に対しては好意的であるが、今後は、「生徒の多様な体験を充実させる時間の確保」と「生徒の心身の発達段階を考慮した部活動指導の効率化」なども考慮しながら効果的で効率的な部活動を進めていく必要がある。
		食育の推進	・弁当作りを通して望ましい食生活の習慣を獲得し、自己の健康を管理していく能力を身につける。	・5月、9月、10月に「My弁当Day」を設定し、生徒自身による弁当作りを通して食に関心をもち、健やかな命を育むための実践力を育てる。	A	・「My弁当Day」における手作り率が80%を超え、生徒が食を通して主体的に健康づくりに取り組む意識の向上と実践力を培うことができた。	・学校給食を「食育」の中心に据え、健やかな命を育むための食に対する知識の習得と意識の向上を図る。
		健康、安全、生命の尊重に対する意識の向上	・「命の教育」を実施し、自他の生命を尊重する態度を育てる。 ・救急救命の技術の習得と意識の高揚を目指す。	・1年「防煙教育」、2年「薬物乱用防止教育」、3年「性教育」を実施する。 ・教職員と2年生を対象にAEDを使った救急救命講習及び緊急時対応訓練を行う。	A	・各学年や全校での講話や専門機関との連携による系統的・継続的な予防教育で意識を高めることができた。 ・教職員を対象に緊急時対応研修を実施した。	・講話実施後にグループワークを確実に位置付け、主体的な学びを促進させる。 ・長期休業中に全職員参加型の緊急時対応訓練を消防署と連携して実施する。
		基本的な生活習慣の定着	・基本的な生活習慣の定着に向けた啓発活動を実施する。	・PTAと連携して生活習慣に関する教育講演会を実施する。また、家庭での協力を呼びかける。 ・毎月1日、「ノーテレビ・ノーゲーム・ノースマホデー」に取組み、望ましい生活習慣を意識させる。	B	・8月3日に本校SCIによる教育講演会(PTAと連携)を実施し、55名の参加があった。 ・「ノーテレビ・ノーゲーム・ノースマホデー」を毎月1回実施することができたが、それが基本的な生活習慣の定着にむすびつくまでには至っていない。	・今年度の方策を今後も継続して取り組みながら家庭の協力が得られるような啓発活動を実施していく必要がある。

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策
学校運営	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	校務等の効率化の推進と教職員の意識の向上	・効率的な業務への取組を推進するとともに、教職員の時間外勤務について1か月当たり前年度比10%削減する。	・各教職員の勤務時間を確実に把握し、特定の教職員に業務が集中しないようマネジメントを行う。 ・定時退勤日を設定し、組織的に取り組むことで勤務時間に対する教職員の意識改革を図る。	B	・時間外勤務の前年度比10%削減は実現できたが、特定の教職員に集中している実態を改善していく必要がある。 ・年間を通して定時退勤日を設定し、意識も改善が図られたが、全職員の徹底した取り組みにはなっていない。	・各教職員の勤務時間を確実に把握し、特定の教職員に業務が集中しないようマネジメントを行う。 ・定時退勤日を設定し、組織的に取り組むことで勤務時間に対する教職員の意識改革を図る。

**4 本年度のまとめ・次年度の取組**

『豊かな学力の育成』では、校内研究会を中心に牛津中授業スタイル(「めあて」→「学び合う活動」→「まとめ」→「振り返り」)の確立を目指して授業改善を図った。アンケート調査から「めあて」や「まとめ」、「振り返り」を意識している生徒が増えていることや「学び合う活動」が好きと答えた生徒が約9割程いること等から学習意欲の向上には一定の効果があったと考える。課題としては、県学習状況調査において昨年度に比べると改善された部分もあるが、県の正答率をほとんどの教科が下回っている現状は変わっていないことである。

『豊かな心の育成』では、道徳教育や人権・同和教育の他、生徒会を中心とした様々な学校行事の中で、生徒の自己肯定感を育みながら豊かな心の育成を図っているが、今後は個人と集団の関係をより良いものにするためにも自分を客観的に観る力の育成が必要と考える。

『健やかな体の育成』では、部活動の活動方針・活動内容や「いのちの教育」の取り組みに対して、生徒や保護者からの評価も高く、教育的効果も上がってきている。今後は部活動のあり方や意義及び「いのちの教育」の広報活動を充実させながら家庭や地域に情報を発信していきたい。また、問題行動等の対応として生徒指導部や教育相談部を中心とした組織的な実践を行うことができ、生徒指導上の諸問題やいじめ問題など早期対応と早期解決を図ることができた。新たな課題として今後はSNS等によるトラブル防止に向けた生徒・保護者へのさらなる啓発活動を強化していく必要がある。